

神の島を神の人に

高谷 紀夫*

「伝わってきたものを、後世にちゃんと伝えていくのが役目と考える。」

「神事の基本は変わらない。変えてはいけない。」

宮島の文化的位置づけは巖島神社の存在とセットになって時代の中で動いてきた。

「神の島」と称される宮島。もし「神の島」を問うなら神の人～神職の人々がその語り手としてふさわしいのではないだろうか。いうまでもなく「神の島」という意味づけもいつも同様であったわけではなく、その時代その時代の中でその意味づけの有り様は変化してきたであろう。その変化は、神職の帰属する神社が政治的にどのように位置づけられてきたかという点にも密接に関係しているのかもしれない。神道が国家化された明治から1945年までと、宗教学法のもと、神社庁に組み込まれた一組織である戦後とは自ずと異なる。しかし神職は上記のように語る。明らかに神社の過去を背負い、不変を旨とする現在の神の人のことばがそこにある。

本論はいまだ研究の序章に過ぎない。巖島神社の野坂元良宮司のご協力を得て、1999年夏以来、幾度か同神社の神職の方々にインタビューを重ねてきた。さしつかえない範囲でパーソナル・ヒストリーについてもお聞かせいただいた。本論ではプライバシーに関わる部分はできるだけ控え、神職の人々が神社・神職・神事をめぐる時代の流れをいかに捉えているかという点に絞り、若干の資料提示と分析を試みることにする。

神社に休みはない。インタビューは、お仕事中の合間を縫ってさせていただいた。貴重なお話を

して下さった巖島神社の神職の方々に、謹んでこの場を借りて御礼を申し上げたい。

【巖島神社とイベント】

現在の宮島にはいくつもの顔がある。そのひとつがイベントを随時開催する観光地としての顔であろう。では神職の方々はそんな観光地としての顔をどのように捉えているのだろうか。イベントと称されるものが、近年増加傾向にあるという印象がインタビューをする側にあった。近代社会における観光とイベントの結びつきについての他地域の事例が念頭にあった。実際、巖島神社を場とする特別奉納公演である宮島歌舞伎や花舞台の広告が、最近新聞で大々的に掲げられていたからである[朝日新聞2000/08/25]。ある神職はそのことを即座に否定した。

「イベントは最近始まったのではない。能の奉楽は、400年の歴史がある。献茶祭は戦前から行われている。玉取祭は室町から。菊花祭、桃花祭も一種のイベント。「宮島歌舞伎」も奉納行事。」

とするならば、神社はイベントと共に発展してきたと言えるかもしれない。

参考資料として『広島県宮島町イベント集平成11年4月～12年3月』から転載する。

同表には、別に舞楽鑑賞の予定一覧表が掲載されている。舞楽鑑賞が加わる場合、観光的要素がより絡むものとして分類できるかもしれないと考え、強調してみた。

*広島大学・総合科学部広域文化研究講座

- 01/01/02/03/05神衣献上式+歳旦祭/二日祭/元始祭/地久祭+舞楽
- 01/20百手祭(大元神社)
- 04/15/16~18桃花祭+舞楽
- 05/03粟島神社例祭(粟島神社)
- 05/15お島廻り+お烏喰い
杉之浦⇨鷹之巢浦⇨腰少浦⇨青海苔浦⇨養父崎神社⇨山白浜⇨須野浦⇨御床⇨大元の9末社・・・願主があればその他に日にも可。
- 05/18推古天皇祭遙拝式+舞楽
- 07/17市立祭+舞楽(1999)
- 旧暦06/17管弦祭07/29(1999)
- 08満潮玉取祭08/28(1999)
- 旧暦08/01たのもさん09/10(1999)(四宮神社)
- 10/15菊花祭+舞楽
- 10/23三翁神社祭+舞楽
- 10/27献茶祭(1999)
- 12/23天長祭+舞楽
- 12/31鎮火祭

もうひとつ別の資料を掲げよう。これは昭和28年に宮島観光協会編のパンフレットにある「厳島神社の年中行事」一覧表である。

- 01/01/02/03/04/05
神衣献上式+歳旦式/二日祭/三日祭/御新祭/地久祭/船唄謡初め式+舞楽
- 01/20百手祭(大元神社)
- 旧正月六日年越祭
- 3月上旬七浦神社祭
- 03/21春分の日祭
- 04/15~16桃花祭+舞楽
- 04/17~18桃花祭神能
- 04/29天皇誕生日+舞楽
- 05/14講社大祭
- 05/15講社島巡式
- 05/18推古天皇祭遙拝式+舞楽
- 旧05/05地御前神社祭
- 06/17例祭
- 旧06/05市立祭+舞楽
- 旧06/11御州堀

- 旧06/17管弦祭
- 旧06/18玉取祭
- 9月上旬七浦神社祭
- 10/15氏神祭+菊花祭+舞楽
- 10/23三翁神社祭+舞楽
- 11/03文化の日祭
- 11/23勤労感謝日祭
- 12月初申日御鎮座祭
- 12/26御神衣御裁式
- 12/29御神衣御綿入式
- 12/31御煤払
- 12/31除夜祭
- 12/31鎮火祭

上記の後者の表を見ながら、神職の方に現在との異同を問うてみた。最初に言及されたのが「年越祭」に関してである。昭和30年頃までなされていたという神前相場、大福引などで構成されるイベントである。現在には伝わらない「金銭の動く宮島」の顔を知ることができる。次に気が付かれたのが「御煤払」に関してである。現在は12月30日の午前中に行われている。但し実際にはその前に掃除は済まされているとのことである。また挙げられていないが、2月11日の建国祭が新しく加わっているとも説明された。

特段言及はなかったものの、昭和28年当時に正月に行われていた「御新祭」「船唄謡初め式」は現在はどうなっているのだろうか。前者は「ちょうな始め」と呼ばれ町内の大工が全員参集しての行事であり、現在も行われている。後者は唄水主一同出仕、舟歌を歌う行事であったらしいが、現在には伝わっていない。宮島の地場産業と結び付いた行事は変化しているのかもしれない。他に、地御前神社祭などの有無にも気が付くが、いずれも厳島神社が本社となる行事である。[広島県神社誌編纂委員会 1994: 340-344]

二つの年中行事一覧で、異なる点よりも重要なのは、ほとんど同じであるということである。行事の名称の括り方に違いはあるものの、基本的な行事は同様なのである。舞楽があるかどうかも後者の表に言及があり、その点も現在つまり約50年

後も全く変わらない。少なくとも戦後からしばらくの時間を経て以降、神の島としての顔で観光客を招いてきた事情は不変だということである。

【パーソナル・ヒストリー、 「近代化」の物語、親子の物語】

パーソナル・ヒストリーから社会科学的に日常世界に解釈を加えた社会学者橋本満氏は次のように「近代化」と物語との関係について説明する。

「人生を振り返って話をするという人々の物語と、それをパーソナル・ヒストリーとして記録しようとする学問的態度との間には、実は共通する暗黙の前提があるとも言えるのである。この暗黙の前提とは、現在から半生をさかのぼるという観点と、近代社会がどのように発展してきたかを理論化しようとする観点に共通する「理論」なのである。半生が語られるのは一定の成果を得た人々の物語としてであるし、現在の社会がどのようにして達成されたかという結果を説明しようとするのが近代社会の物語である。両者をつなぐのは、個人の成長(社会化)が社会全体の変化(近代化)と同様の道筋をたどるという「神話」である。・・・過去を語っているようでいて、実は現在の自己を語るために過去を語り直しているのである。」

【橋本 満 1994:14-19】

厳島神社の神職の人々のパーソナル・ヒストリーも、ある時代を生き抜いてきた、その意味の範囲で「日常世界」ではあるが、橋本氏の主張する近代社会の物語とは、対極的な位置にあるように思える。神職としての修行は、確固たる神道のルールの中にあり、神職としての個人の成長は、あくまで厳島神社あるいは同神社が所属する神社庁の中での社会化の成長だからである。また、前章で提示したように「神事には何の変わりはない」という彼らの主張は、神職としての語り、社会の近代化と歩調を併せた成長の物語では必ずしもないことを暗に示唆しているようである。第二次

世界大戦という経験は、その前後で制度的には、厳島神社のあり方の基盤を変えた。その経験を踏まえた上で、上記の語りが構成されていることは留意に値するのではないだろうか。

厳島神社では、インタビューをした時点では、宮司1名、権宮司1名、禰宜8名(社内禰宜4名含む)、権禰宜17名、出仕2名、内侍8名などの多くの方々が神事が支えられている。出仕とは見習い神主のことである。神社によって異なるが、厳島神社では、出仕を3年勤めて権禰宜となると聞いた。神職の方々は全員島内に住居を構える。内侍は通ってくる。神職は、舞楽と共に笛が必修で、ひちりき、笙、太鼓、鞆鼓の楽を、ここでは一通りこなすという。

同神社で代々神職をしているのは五つの家である。今回インタビューをした方々の大半もその家の出身の方々であった。そうでないおひとりも祖父が神職であったという。全体としては、厳島神社で代々神職であった方々は半数弱である。

ある代々神職の方は、神社周辺の変化に関して次のように語る。

「親子が同居して文化が伝わっていく。今はそのあたりまえがあたりまえでなくなる。国宝のお宮とはいえ、技術が消えていく。たとえば檜皮葺き職人はいない、材料はない。子供の頃、島内に30名いた御用大工が5～6名。50歳以上がひとりいるか。40～50歳代がひとりいるか。維持は大変だ。最近の台風の後も、神職自身が維持に奉仕している。」

「管弦祭での参拝者が少なくなった。船の構造が変わった、スクリー位置が真ん中になった。親から子へつながらない。」

年中行事で言及した正月の御祈祭も、継続されているとはいえ、参列者の構成が変化していることは想像に難くない。ところで「二世」という親子関係へのインタビューの記録を上梓した人類学者船曳建夫氏は、結びとして次のようにまとめている。船曳氏は「二世」と称される人々にインタビューする過程で、人類学の古典的テーマである

親子関係に注目している。

「二世」は・・・人間の中でも、親子の期間が長い。人は親子の作法を学びながら、親子であることを続ける。二世は親子の作法を長い間かけて学ぼうとする人たちだ。全ての子は二世であり得る、ということが意味を持つとしたら、その点においてのみである。」

[船曳建夫 1998:327]

船曳氏のいう「二世」は、ある著名人の「二世」という一般的な意味もさることながら、最後の文にあるように「全ての子は二世でありうる」のであり、親子関係の解明を念頭においたレトリックであることは明らかである。巖島神社の神職で代々同神社に奉仕してきた方々も、また船曳氏のいう親子の作法を長い間かけて学ぼうとしてきた方々である。その方からの「親と子の連続性の主張」は発言として重い。ある神職はいう。「修業中も「故事に則って」と教えられる。」と。巖島神社には、神撰の捧げ方が交差するなど、他の神社とは異なった作法がある。いずれも故事に則って継承されるのである。

【神職の社会化】

神職の社会化はどうやってなされるのだろうか。社会化に、巖島神社とたとえば同じ広島神社庁管轄下の大半の神社の神職とでは異なるのだろうか。戦争という経験は、その社会化のあり方を変えたのだろうか、変えなかったのだろうか。

野坂宮司は現在39代目にあたる。同宮司のことばで印象に残っているのは「身体は広大、手は皇学館、頭は國學院」ということばである。広島大学卒業で教師資格をもつ同宮司は、広大進学前に旧皇学館の教授助教授が開いていた神道の塾で3年学んだ。皇学館が閉校させられていた時代である。そして卒業後、神職としての資格を得るために國學院へ進学した経歴をもつ。また、ある欄直の父は戦時中に朝鮮神宮へ奉職していたという。このような語りにも、戦争と神道との関係の一断面

を垣間見ることができよう。

現在、神職の資格を得るには、大きく分けて3つの方法がある。神職養成機関、検定講習会、検定試験である。神職養成機関としては、4年間の明階課程に國學院大学と皇学館大学の学科・専攻科があり、2年間の正階課程は、大社国学館など全国七カ所にある。検定講習会は國學院大学他各地の神社庁が主催して、正、権正、直階の取得が可能とされる。ちなみに明階の上の浄階は名誉職とされる。検定試験は神社本庁及び仙台・名古屋・大阪・福岡の四カ所の神社庁で実施されている。[神道を知る本 1993、日本「神道」総覧 1995]

ある神職は「父には何もいわなかったが、母が勧めて」國學院に進んだという。家庭環境ということばでは簡単に表現できない、巖島神社で代々神職として仕えている人の親子関係への認識がある。

巖島神社の神職の方々へのインタビューを実施する前に、県内郡部の神職の方々へインタビューを重ねていた。その方々のほとんどは、神職とは別に教師、行商、などの職業をもつ兼職の方々であった。但し、彼らもまた先代、先々代が神職であり、その後を継いでいる方々も少なくない。ある神職は先代が亡くなった後、先代の骨を前に太鼓の練習をしたという。「太鼓をすればお祓いが止まる。お祓いをすれば太鼓が止まる。」この状態を50日間続けたと、先代との関係を回想しながら語ってくれた。親子関係という点では、巖島神社の神職と兼職の神職との間で、共通する考え方や経験があるのだろうか。いうまでもなく、両者の現場とその社会的背景については、引用される厚い過去、歴史的由緒、神社の規模、神職の数、観光地としての顔などその差異は明らかである。しかし、親子関係の連続性を背景とする神職としての自負についてはインタビューによる限り同様であった。それはもしかするとインタビューが現役の神職と相対しているからかもしれない。また歴史的由緒に関して巖島神社は別格であるものの、昭和21年に社格が廃止され、現在は広島神社庁というひとつの組織の中に組み込まれているという

現実が、そう感じさせるのかもしれない。そして
巖島神社も確かに時代の流れの中にある。ある神
職は語る。

「世の中の変わり様は激しい。観光的要素が強
い。しかし観光で安閑とはしてられない。」

巖島神社は、「変えてはいけないこと」と「変わ
っていかねばならないこと」その両方の顔を
もち、神職の方々はその担い手として奉職してい
るのである。今後も可能ならば、神職の方々への
インタビューを重ねたいと計画している。その作
業は「語り」をして「神の島」としての人間の確

かなある横顔を浮き彫りにしたいと考えるからに
他ならない。

[参考文献]

- 橋本 満, 1994 『「語り」としての家』行路社.
広島県神社誌編纂委員会(編), 1994 『広島懸
神社誌』広島県神社庁.
船曳建夫, 1998 『親子の作法』ベネッセ.
別冊歴史読本『日本「神道」総覧』1995 新人物往
来社.
別冊宝島EX『神道を知る本』1993 宝島社.